幼稚園教育要領における総合的な指導
－オルフの教育方法による考察－

三　井　真　紀

1．背景

ドイツの教育家・作曲家であるカール・オルフ（Carl Orff　1895－1982）の教育理念は、自由度が高く、総合的な保育環境を生み出す可能性が極めて高い[1]。オルフ研究所（Orff-Institut・Surtzburg）では、多様性を重視した総合的な視点によるカリキュラム編成が特徴的であると評価されている[2]。教育理念に基づいた指導法は現在も研究所を通してうけつがれ、指導者が各国に戻り、世界で展開されている。研究所においては、さまざまな国籍や文化的背景をもつ学生や指導者が、個性を発揮できる環境が用意されている。彼ら同士にも意思伝達可能な環境が創り出されていることは特徴的である[3]。オルフは特に、表現活動教育を通して総合的な指導を体言した。中でも、‘子どもは自ら音を作り出す力を備えていること’‘音は単独にあるのではなく動きやダンスや話し言葉と常に関連をもっていること’‘それらは、誰かに聞かせるためのものではなく、伝達の手段として使われるものであること’を具体的な指導で提示している[4]。誰でも出来る音作りであることを目標としたのである。そして、動きと即興演奏とリズムの統合の重要性を常に主張していた。人間の内部にあるシンプルで純粋で自然な衝動に属するこのスキルの調和の源を《エレメンタリームジーク》と呼び、これがオルフの音楽教育（オルフシュールベルク）の根源となっている。後に、夫人のゲルトルート・オルフが、音楽療法への活用を考え、オルフムジークテラピーとして確立した内容は、このコンセプトに基づくものである[5]。

2．目的

日本における幼稚園教育の指針である「幼稚園教育要領」[6]には、‘幼稚園教育の基本’や‘教育課程の編成’においても総合的な指導について重視する傾向がある。しかしながら、具体的な方法については検討の余地が残されていることも事実である。本研究は、オルフの教育理念には、幼稚園教育要領における「総合的な指導」を考える上での有効な理論が含まれているという仮説を構築していくための基礎研究である。

最初に、オルフの生涯と教育理念について概観する。続いて、オルフ研究所（オーストリア）におけるサマーセミナーや日本の状況から手がかりを探る。最後に、萩原によるマジョリティ・マイノリティの関係・園環境の理論図[7]をもとに、オルフの教育環境や指導法における総合的な指導という視点について考える。それらが、幼稚園教育要領における総合的な指導の実現化に、どのように結びつくのか可能性を探ることが目的である。

3．オルフの教育理念

オルフは、20世紀のドイツを代表する教育者・作曲家である。音楽教育においては、ダルクローズ、コダーイとならぶ世界有数の実践家でもある。彼の作曲観について、Liess, Andreasが「原始的・歴史主義・人道主義・魔性」[8]といった特徴を指摘する。オルフは、そのような独特の音楽観によって、創造的な教育の理念を示してきた。

オルフは1895年７月10日、祖父母、両親共に由緒ある音楽一家の長男としてドイツのミュンヘンに生まれた。５歳からピアノを始めたが、決められた練習はほとんどすることがなかった。即興音楽で、自分の好きな曲を作り、そればかりを弾いていたという。ドイツのミュンヘンで86歳の生涯を閉じるまで、作曲や子どもへの指導、後継者育成など積極的な教育活動を行った。

オルフの教育活動は、大きく２期に分けられる。第１期は、大人を対象とした教育活動の時期である。舞踏教育家ギュンター（Dorothee Gunther　1896－1975）と共に、統合的な表現を目指した学校ギュンターシューレ（Gunther-Schule）を創立し、教育に励んだ時期である。きっかけは「ほとんどの学校が伝統的に束縛され、画一的な教育が行なわれたことに失望し、（中略）基礎教育が行える学校の創設の実現化を考えるようになった。」[9]というものであった。

第２期は、子どもを対象とした教育活動の時期である。Elementare Musikを中核としたOrff-Schulwerk（オルフ・シュールベルク）という教育用作品を生み出した。それは「音楽・言葉・運動」に「遊び」を加えたリズム中心の音楽教育用作品であり、子どもとの活動の中で作られていったものである。Elementare Musikについて、オルフは次のように語っている。「エレメンタールとは、ラテン語のelementariusつまり、『要素』をなすものであり、構成の素材であり、根本的なものであり、出発点をなすものであります。」[10]そこでの基本は、日常生活の「遊び」に着目したものであった。

オルフ自身も、「Orff-Schulwerkは、システムでもメソッドでもない」という[11]。バイエルン地方の子どものための音楽とその教育のアイディアにすぎないということであった。その理念・方法上の原則をまとめると、およそ次の６つである。

(1)　子どもが生得的にもっている音楽語法による即興表現
(2)　言葉の音楽的特質―リズム・抑揚・フレーズ感など―から活動を始める
(3)　子ども自らが音楽創造にかかわれる楽器を用いる
(4)　言葉・身体表現・ダンスと統合・総合された音楽の追究とその教育
(5)　子どもの実態そのものから始める。したがって民族性・地域性等の差異によって教材・方法は異なる
(6)　当然、すべての子どもたち（能力の有無にかかわらず）が参加可能

特に、(5)や(6)は、子どもたちの特別な楽才も予備教育をも条件とはしない。またそれは、子どもたちに不当な制限を強いるのではなくて、むしろいろいろな課題を提示することによって、個々の和音や音階のすべての共通基礎をそこなわずに自分たちの能力を試みることが可能な活動の場を与える[12]。Orff-Schulwerkが正しく用いられるならば、器用な子どもたちにも不器用な子どもたちにも価値多い課題を与えることができるであろう。

現在の多様な子どもたちを支える社会において、ある子どもには適するが、ある子どもには抑制になると思われるようなことは総合的な指導とはいえない。もともと、Orff-Schulwerkの本来の目的は個人的および超個人的な力の実り多い合同演奏の喜びの中に実現される。しかも、音楽

の創作、再現、聴取の諸課題は、それぞれ互いに分離した学習領域に分割されるのではなくて、一つの基礎過程として一体となって行なわれる。それは、道しるべであり、一つの視点であり、きっかけにすぎない。つまり、計画し実際に行う場合にも、内容はいつでも変更可能で、またときどきの事情に合わせるべきである。オルフーシュールヴェルクの中で、過程（Process）という言葉は非常に大切である[13]。オルフの過程とは＜探求＞と＜経験＞である。まず最も単純で、ほとんどありのままの形式の要素が探究される。経験を通して、これらの要素は、より高度な探究と経験の水準へと洗練され、高められる。このようにして動きを動機づける内的要素は、すべての基礎である。そして、他のすべての学びの体系に継続していく基礎である。

4．オルフ研究所（Orff-Institut）の現状

オルフ研究所は、1961年７月にザルツブルグに設立された。1963年10月にはオーストリア国立芸術音楽大学モーツアルテウム音楽大学の特設11科としての位置付けとなり、1988には音楽学部の正式な学科に認められた。現在は、（大学の合併の後）ザルツブルグ大学芸術学部に「音楽と動きの教育学科」として存在する。ザルツブルグの研究所は、オルフの創った唯一の研究所であり、オルフの理念は現在もここから世界に発信されている[14]。現在は、サマーセミナー（英語・ドイツ語）、教育指導者養成コース、現職の教員のための単位加算認定コース、オルフ教育の発進センターとしての役割、子どもの教育機関としても機能している。

コースには40種類をこえる講座が用意されている。展開される教員養成のカリキュラムは、日本における一般的なカリキュラムとはかけ離れたものであり、様々な講座をうけなければ卒業できない。たとえば、子どもにかかわる養成コースにおいては、教育学・言語学・音楽・美術・演劇・環境学など、幅広い総合的なアイデアと芸術センスを磨くための講座が用意され、相互に機能している。学生の年齢層は幅広い。また、高校を卒業して入学する学生はまれで、現役の小学校教師、幼稚園教諭、大学講師のほか、特別支援教育、言語学、教育学などの学びをおえたものがほとんどである。音楽専攻者は学生全体の１割程度であろう。生活レベルでは、学生の国籍や文化的背景などがまじりあった空間が特徴であり、サマーコースにおいては、その一端を見ることも可能である[15]。たとえば、1997年に筆者が参加したザルツブルグのサマーセミナーにおいては、一クラスに22カ国の受講生がおり、講義も英語、フランス語、イタリア語、スペイン語などが混在したものであった。しかしながら、オルフの指導法を学んだ講師が展開する講義は、言葉を超えて理解可能であり、魅力ある展開が印象にのこるものである。指導者にとっても、総合的な指導という点において魅力あるものであった[16]。1997年のサマーセミナー期間中の科目選択においても、必修10コマのほか、子どもの教育関連科目として17科目の用意がされた。

5．日本における現状

オルフの音楽教育理念は、日本の教育現場や保育現場にも影響を与え続けてきた。

大谷は、「そこにあるのは彼のアイディアであると言われる。メソッドがないということは、それぞれの時代、それぞれの国、そして指導者によって、それを自由に使うことができるという利

点をもつ。」[17]と述べオルフの指導法の総合的視点に注目している。しかし、1953年に雑誌『教育音楽』に、わが国最初のオルフについての紹介がされた。当時、総合的という日本ではまだ珍しい概念を受け入れる体制が整うことは難しかった。「オルフの音楽教育の特異性ばかりが受け入れられたために、本質部分の究明がなされず、その帰結として一時的な流行に終始したことへの反省があった」[18]という記述もある。そして日本において‘総合的’という視点が、現在でも受け入れることが難しい概念であることは否めない。そのような中、日本オルフ音楽教育研究会[19]では、様々な活動を展開し、セミナーを通じて「具体的かつ総合的な指導」という視点に注目し続けている学術団体であるといえよう。毎年数回の例会やワークショップ、シンポジウムを実施する。また、研究成果発表の場として、「オルフ『子どものための音楽』」を発行している。

6．Accommodationの理念と理念型

Accommodationとは、an adjustment or adaptation to suit a special or different purpose（特定の、または異なる目的に添うように調節したり適応したりすること）という原意である[20]。バーンステイン（Bernstein）は、文化的再生産の妨害者としての学習理論の特性を論ずる中で、大人（保育者）中心の「支配—domination—」の概念を、子ども（幼児）中心の「適応—Accommodation—」概念に代えるという幼児期の学習理論の特徴を指摘している。また、ファーハムとボクナー（Furham&Bochner）は、異文化接触の問題を論ずる際に「適応（adjustment）」という概念は文化的に異なる人たちの関係改善には次の点で向かないと批判している[21]。

・異文化に滞在する人の失敗は、治療が必要なある種の潜在的な病理の症状であるという含みがある。
・新しくやってきたその人のあらゆる問題は、その滞在社会の価値観と習慣を喜んで受け入れさせ、かつ文化的血統を捨てさせることができれば解決されるという意味を含んでいる。

以上のような理由で、適応の概念を批判した上、adjustmentに代わる概念としてcultural accommodation（文化的調整）という概念の提示をしている。その意味を和訳すると「自分を失って相手文化に適応したり順応するのではなく、相手とのやり取りを調整しながらうまくやっていく」ということを意味している。

日本においては、萩原が体系的に説明すると同時に、バーンステイン（Bernstein）のコード理論の展開をもとに「他者の心理的要求を受容し、他者が自己の意思で自立できるように援助すること」と訳し定義付けた[22]。異なるもの同士が、相互の要求を満たす方向で意思疎通をはかるという意味でAccommodationを捉えようとしたものである。

Accommodationの概念を応用し、萩原による２タイプの構造に着目し、オルフ研究所の環境構成をあてはめる。表１は、マイノリティである外国人（籍）の幼児や保護者にとって、どのような園環境の構造が理想的または可能であるか明らかにするため設定された一つの理念型である[23]。

表１のＡタイプは権威的主従関係の構造特性を持ち、コミュニケーション体系は一方向的で、マイノリティに対するマジョリティの体系に生じやすい傾向だといえる。一方、表１のＢタイプは理念的には意思決定の力は平等に配分されるので、権威的主従関係の構造特性はなく、コミュニケーション体系は二方向的で、マイノリティからマジョリティへの要求やフィードバックの伝達も容易になる。つまり、Ｂタイプの構造をもった環境においては、人はマイノリティに対して、

表1　マジョリティとマイノリティとの関係・園環境の構造（萩原．1996）

〈Aタイプ〉		〈Bタイプ〉
閉鎖系	（構造的特性）	開放系
明示的	（主従的関係）	暗示的
保育者 ↓ 幼児・親（支配的（タテ型））	（コミュニケーション体系）	保育者　幼児・親（適応的（ヨコ型）（相互調整的））
単一	（文化）	多元的
明確な境界線的	（二者間の境界線）	巾広い境界線
We/I 統制	（集団 対 個）	I/We 援助・支援
役割重視	（役割 対 個性）	個性重視
和	（秩序化の原理）	調和
明示的	（規範）	暗示的
供給、教示	（援助の方法）	促進的援助
分離主義	（基本的原則）	統合主義

その個性に敏感となる。同時に、日本人の幼児とも主体的に違いを認め合う、柔軟なAccommodationの姿勢をとることになると予測できる。つまり、Bのような環境においては、すべてのマジョリティが、自分と違うモノに出会ったさいにも、違いを認め、相手を知る努力を惜しまないという形ができあがる可能性を持っている。さらにそのような構造ができあがると、たとえ同じ状況同士であっても、より一層互いの個性を認め、自他の違いを尊重する調整能力の可能性を拡大していくとも考えられるのである。日本の現状においても、個体差の大きい、様々な個別の課題を抱える幼児教育にとって、非常に意味をもつ課題である。オルフ研究所の指導の中では、(1)カリキュラム(2)学生の構成(3)教員と学生の関係性、の面から捉えた場合、AタイプBタイプの比較が可能である。それは、異なる文化的背景の学生が受講するにも耐えうる構成であり、自由度が高いといわれる所以であろう。また、オルフ自身の「過程」を大事にした構成を始め、Orff-Schulwerk作成における子どもとのやり取りについても、コミュニケーション体系という意味においてよりBタイプに近い状況であると判断可能である。オルフ研究所における関係性や環境は、日本の「多文化」概念に基づく園構造と類似点が多いことが示唆できる。また、講座内容を含めてあらゆる環境が、「総合的」であると同時に「多様性」という概念に隣接していることも明らかである[24]。

7．まとめ

「子どもの活動は、未分化であったり総合的であったりする」と井口は述べている[25]。

自由度が高く、個性を尊重する理念を受け継がれたオルフ研究所は、日本が苦手としていた「総合的な指導」へ示唆を与えてくれる。しかし、幼児期の複雑さを指導者が十分理解し、子どもに適した「総合的」な指導を実践することが望まれる。「子どもに適した」ということは、たとえば個体差を理解し、多様性に配慮するという視点も必要である[26]。オルフが教育理念を掲げ、研究所を創設したのはもう40年も前のことになる。当時のままの理念を崩さず教育活動が展開され、

これまでも社会に多大の影響を与えてきた事実から、より具体的にそれを探ることも可能である。また、活動を受け継ぎ、展開し続けるオルフ研究所のカリキュラムや、オルフ自身の理念を引き続き分析することによって、これからの日本の保育現場の現状が、改善される可能性が予測できるものである。

日本の幼稚園などの保育現場における「総合的」という概念の捉え方については、まだまだ議論の余地がある。現在、オルフの教育理念そのものを見直すことは、オルフのElemenataleな発想を生かすという意味において、保育現場でも、養成校における段階においても有効であろう。

引用・参考文献

1 三井真紀 Carl Orffの教育理念における多文化教育の検討 日本保育学会第55回大会発表論文集 135 2002

2 三井真紀 オルフの音楽教育理念を生かした指導法—オルフ研究所の活動から— 国際幼児教育学研究 第6号 国際幼児教育学会 23－34 1999

3 三井真紀 Carl Orffの教育理念における「多文化教育」の構造 湊川女子短期大学紀要第35号 湊川短期大学 82－87 2001

4 大谷純一幼児の音楽教育における「C．オルフの音楽教育」のもつ意義—U．ユングマイヤーの授業事例を基に— 聖セシリア女子短期大学紀要 第26号 31 2001

5 丸山忠璋 療法的音楽活動のすすめ 春秋社 3 2002

6 文部省厚生労働省 幼稚園教育要領 保育所保育指針 チャイルド本社 3－4 2004

7 萩原元昭 外国籍幼児に適応する園環境の構造 国際幼児教育学会 第3号 1996

8 井口太 「オルフの音楽教育」 現代保育用語辞典 岡田正章他編 フレーベル館 473 1997

9 藤井康之 1945年以前のC．オルフの音楽教育理念—『ORFF-SCHULWERK Elementare Musikubung』の分析を通して— 音楽教育学 第28—2号 33 1998

10 カール・オルフ著 属啓成訳 カール・オルフ博士を迎えてこどもはリズムに生きる NHK 10 1962

11 野村 幸治 中山 裕一郎 音楽教育を読む 音楽之友社 74 1998

12 ヴィルヘルム・ケラー フリッツ・ロイシュ 橋本 清司 訳註 『子どものための音楽 解説』 音楽之友社 1971

13 同上

14 芹澤美奈子 幼児教育へのオルフシュールベルクの可能性に関する一考察 兵庫教育大学大学院修士論文 1997

15 鹿島正昭 オルフ・シュールベルク国際シンポジゥム報告 名古屋自由学院短期大学研究紀要 第20号 169－184 1998

16 Orff-Institut. International Summer Course Music and Dance Education : *Orff -Schulwerk. WELKSHOP2.* 1997.

17 大谷純一幼児の音楽教育における「C．オルフの音楽教育」のもつ意義—U．ユングマイヤーの授業事例を基に— 聖セシリア女子短期大学紀要 第26号 31 2001

18 藤井康之 我が国のオルフ研究におけるElementare Musik 受容の史的変遷とその課題—Orff-Institut Studienplanから学ぶもの 音楽教育史研究 第1巻 41 1998

19 Orff-Schulwerk Gesellshaft in Japan、学術研究団体.

20 Bernstein, B.(1975) On the classification and framing of educational knowledge. I : *Class, Codes and Control vol. 3. Towards a Theory of Educational Transmission.* London and Boston: Routlrdge & Kegan Paul.

21 Bernstein, B.(1975) On the classification and framing of educational knowledge. I : *Class, Codes and Control vol. 3. Towards a Theory of Educational Transmission.* London and Boston: Routlrdge & Kegan Paul.

22 萩原元昭 外国籍幼児に適応する園環境の構造 国際幼児教育学会 第3号 1996

23 同上

24 Greenman, Jim. Living in the Real World: Diversity and Conflict. (1989) *Exchange*. Provides examples from child care settings that make it easier to perceive and know how to respond to differences.

25 井口太　幼児の即興的音楽表現の指導と評価方法に関する一考察—C.Orffの音楽教育理念の適応のための基礎研究—東京学芸大学紀要　1部門36　121～137　1985

26 Grant,C.A.&Sleeter,C.E.(1985). The literature on multicultural education: Review andanalysis. *Educational Review, 37*, 97-118.